
BIOHAZARD beSidE

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIOHAZARD beside

【Zコード】

Z77160

【作者名】

maki

【あらすじ】

基本的には番外編、以前執筆していた作品とは全く関係のない話になるかもしれません。シリーズの方でも他のバイオ関連の作品を載つけているのでそちらもよろしくお願ひします。

奔走少年：世界中が困惑しだす少し前の話、ウイルスに犯された町で奮闘し続ける少年がいた。少年は事件の解決のために奔走するが

……

奔走少年・悲劇（前書き）

しつかり書ければいいのですが……

奔走少年・悲劇

運命というものの残酷さって本当に理不尽だと私は思つてゐる、どれだけ勉強しても高校や大学、はたまた中学校、いや小学校まで落ちる可能性があるのだ。まあ、その場合は自分以外の人間が自分以上の努力をしていたというのがその明確な理由であり、正直言つた話それを誰かのせいにするなんておこがましい、だつて完全に自分のせいなのだから。

そういう人間に問う、お前は一時たりとて怠らなかつたか？常に全力で努力し続けたか？きっと答えは……

「くたばれ」

少年はスコップを振り下ろす、小柄でありながらもその一撃の威力は凄まじいものがあり、少年の正面にいた人間の頭はぱっくりと割けた。ドバッと出血するが少年は一滴たりとて返り血を浴びることなく他の人間をスコップで蹴散らす、遠心力を利用しながら頭部を碎く。それだけ少年の取つている行動は異常な行為であるにも関わらず周囲の人間はどんどん少年に近づいてくるのだ。むしろ第三者の視点から見たら周囲の人間の方が異常に見えることだろう。それくらいに異常であり、異形の光景だった。

「数が多いな」

にも関わらず、その異形な光景の中心にいる少年は至つて冷静なのだ。小心者でなくとも発狂しそうなこの状況、少年は慌てることなくスコップを人間の頭に振り下ろし続ける。不謹慎なことだが少年はBLUE HEARTSのハンマーを歌つていた。

「たとえ春の雨が降つて、僕は部屋で独りぼっち… 夏をつげる雨が降つて、僕は部屋で独りぼっち…ハンマーが振り下ろされる、僕達の頭の上に、ハンマーが振り下ろされる、世界中至るところで！」

何人目になるのか、少年はまた人間の頭を碎く。本来ならば少年は重罪人として扱われるだろう、だが思い出して欲しい。戦争中はいくら人を殺したところで罪にはならないのだ、たとえ一個人が100万人殺したとしてもそれが敵の人間だつたら英雄として扱われる。戦争が終わるまでなら殺人は許可されるのだ。

少年が置かれている状況はそういう状況、まさしく戦争という状況で今朝から少年にとっての戦争は始まっているのだ。

「しかも理不尽かつ不愉快極まりない」

突破口を開いた少年は一気にそこを駆け抜ける。少年の周囲を囲っていた人間達はゆっくりとしか動けないのか少年を捕まえるどころか触れることすらできない。だがこれは彼らが遅いということもあるが少年が速いということでもあるのだ。

少年は背後から迫る呻き声を気にすることなくその場を走り去る、辺り一面から迫ってくる奇妙な人間の群れは少年に傷一つとして付けることなくフラフラと追いすがるだけだった。

「クソゾンビ共め……」

少年は忌々しそうに吐き捨てた。

事の発端は数時間前、2006年某日の朝方。少年は、いや、たくさんの人間が事件の渦中にいた。起床したら家の外には凄まじい数の悪夢がはこびり人を喰い散らしている。少年の両親は母親がその様子を見て発狂してしまったのか父親に噛みつき母親を引き剥がした頃には父親も発狂してしまい、妹が二階から降りてくる様子を察した少年は「発狂した両親を見せられない」と思い手元の包丁で両親の頸動脈を引き裂いた。

「兄貴何してんの……！」

「……」

そのまま妹は部屋に引き返し引き籠もつてしまつた。少年はそれで良いと思っていた。妹は医者の両親をいたく尊敬していた。少年は両親からの期待についていけなくなり、しかも互いにそれぞれ浮気をしていたことも知つていたため両親から心が離れていたからなんの抵抗もなく両親を殺害し得たが妹は違う。もし両親が周りに流れ出て発狂したなどと知つたら、互いに共喰いまで始めたなんて知つてしまつたらそれこそ悪夢だ。妹まで発狂しかねない。妹も両親と同様に少年から距離を置いていたが少年は妹を大事に思つていた、なんだかんだで今となつては唯一血を分けた肉親の一人だし最近は彼氏が出来たらしい。可愛いとか妹相手に思つたことなど無かつたがそれでも当然のように兄として妹には幸せになつて欲しいと考えていた。

「……やばい」

なんたることかこの家にはほとんど食料がなかつた。調味料はたく

さんあるのだがそれだけで生きていけるほどランボーな生活は送れるわけ無い。少年もだし妹もだ。少年は要らないと思いつつもポケットに両親の財布を忍ばせたくさん食料が入るようリュックサックを背負う。とりあえずこれも必要ないと想いながら包丁も持つて行くことにしてドアを少しだけ開けて外を覗く。幸いなことに外を行徯しているゾンビは一人もいなかつた。

で、物語は冒頭に戻る。少年は意外に自分が強いことを知りながらよつやくスーパーに到着した。

「……いないのかな？」

物音が何もしない事を確認しながら忍び足で入っていく。どうやらかなりの乱闘があつたのか店員や客がばたばたと倒れている。とりあえず水道とガスと電気が通っていることは確認したからインスタント的なモノで何とかなるだろう。手当たり次第にリュックに詰め込んでいく。これ以上入れたら動きに支障が出るといつくらいに詰め込むとリュックを背負い直す。ついでに懐中電灯を棚から盗るとここぞスーパーから出て行つた。

入れ違いにすごい速度でスーパーに逃げ込んだ女の子がいてその女の子が引き連れてきたのか大量のゾンビがスーパーに押し寄せてきた。少年はあーと嘆息しながら中身の詰まつたリュックサックを振り回しながらスコップやら鉄パイプを振り下ろし続ける。20体ほどのゾンビを屠つたところでようやく群れが途切れる。体力的に限界が近づいてきた少年はそれでも必死で走り抜ける。止まるところなく家まで走りながら息を切らし、時々襲いかかってくるゾンビを蹴散らす。

少年は必死に走つて玄関になだれ込む。後ろから大量のゾンビが迫つてくるため急いで鍵を閉めてから少年は肩で息をしながら倒れた。少年はへ口へ口だった。血管のあらゆる所に乳酸が溜まり動いただ

け吐き氣を催すくらいだったが少年にはまだやるべき仕事が残されていた。両親の死体を庭先に埋めなければならぬのだ。だからスコップを道端で拾つたのである。

「……吐くな、これは」

血まみれのままリビングに放り出されている両親を引きずりながら庭に出す、あまりに凄惨すぎる光景は妹が見たら失神はおろかショック死してしまうかもしれない。それだけは避けなければならない、少年はできるだけ急いで両親の死体を埋める穴を掘り始めた。

「兄貴……」

背後からの声に少年が振り向くと妹がガチガチと歯を鳴らせながら包丁を構えている、少年はなるだけ妹を落ち着かせるよう丁寧で言つた。

「福、お父さんとお母さんは病氣だつたんだ」

「わざわざ病人を殺す必要なんてないでしょー、なんで……なんで!..」

歯が鳴つてゐる音が少年の元にも届く、少年は妹を落ち着かせることが不可能に近い所業だと知つたがあくまで落ち着いた姿勢を崩すことなく妹をなだめる。

「福、何か暴動が起きたとか人がたくさん暴れてるとか食べる病氣とかいう情報をニュースとかラジオで聞いていいのか?」

「そ、そんなバカなニュースなんてやってないわよ……」

「……?」

少年の頭に真っ当な疑問が浮かぶ。おかしい、これほどの騒ぎが知らされていないなんて……？

「あ、兄貴とお父さんお母さんの仲が悪かったのはわかつたけど、こんな事にするくらい仲が悪かったなら相談くらいしてくれてもよかつたじゃない！」

「福、それまでだ。それ以上大きな声を出すな」

「つるさいーあんたなんかもう兄貴じゃ……」

少年は強引に福の口を塞ぐ、手のひらを必死で噛みついてくる福の歯が痛かったが少年はその手を離すことなく耳元で囁いた。

「少し黙れ、お前に構つてやれる時間がない」

暴れている福の口を塞いだまま福を一階の部屋まで運ぶ、ドアを閉めて福が出れないように椅子を立て掛けた。これでよし、少年はそう呟いて下に降りると庭に転がっていた両親の死体がなかつた。

「……」

少年は自分の嫌な予感が当たつたことを怨めしく思った。どうやら今の自分が置かれている状況はゲームなどによくある『歩く死者』コレヒング オブ・ザ・デッドとこつやつらしこ。

「どこにひとはまきつと誰かが背後で糸を引いているはず……かな？」

恐らく敷地内いるであろう両親の死体を目動きだけで探す、左、上下、背後、振り回しづらいスコップを捨てて福が持っていた包丁を取り上げる。

そう言えばどうやって福の口を塞げただろう？ けつこう怖かった

のに福はどうして自分を刺さなかつたんだろう？疑問はどうんどう浮かぶが今はそれどころではない、不思議なことに体に震えはなく思考は至つて冷静だつた。

「見つけた……！」

少年は床を蹴ると僅かに動きのあつた台所へ駆ける、転がつていた台座を台所に放り込みながら姿を見せた両親だつたゾンビの額に包丁を突き立てる、ゾンビが後ろに倒れ込むと同時に少年はさらに深く包丁を刺し込みながら喉元まで強引に切り裂いた。骨」と切り裂いたため包丁はポツキリ折れてしまい、完全に使い物にならなくなつたためすぐに少年は新しい包丁を棚から取り出した。

「父さんなのかなこれは……母さんも殺さないと」

その時一階へ向かう階段から物音が聞こえた気がした。少年は咄嗟に福の存在に気付き、もう一本包丁を取り出しながら階段へ急ぐ。母親だつたゾンビは一階の部屋の福の臭いを嗅ぎ付けたのか少年の察した通り階段にいた。

「こいつちだよ化け物！」

少年は三本ある包丁のうちの一一本を投擲する、後頭部にズガツとう汚ない音がすると同時に包丁が突き刺さつた。

ゾンビはすぐに少年の方を向く、少年は母親だつた死体の不様な姿に哀れみすら覚えてしました。

ずっと勉強して医者にまでなつて、その末路がこれか……理不尽な人生だよな、母さん……

「ああ、ああ、あ、つー！」

口から包丁を押し込む、完全に脳髄を破壊したことを少年は察するがこれは死体だ、死んでも動いているこれが簡単に活動を止めるとは思えない。

少年は頭部を集中的にいたぶる、少年の頭からはこれが母親だったなんて事はどこかへ消え去っていた。

殺さないと、殺さないと。なんとかして殺さないと。

妹だけは、福だけは守らなこと。

俺にはもう福しかいないんだから。

近くにあった椅子を振り上げダンッ！ダンッ！と繰り返し頭部を擦り潰す、もう母親どころかゾンビの面影すら受け取れないくらいに頭部は原型を失つており少年はそれでも椅子を振り上げ続ける。

「兄貴本当にやつてんの……！？」

「……福」

少年は今持っている椅子は自分が福が出ていかないよつてドアの前に立て掛けていたものだということを完全に忘れていた。一旦福に視線を移してからゾンビに視線を下ろし、それから福に視線を戻して少年は至つて冷静なまま、福に言つた。

「福、父さんと母さんを埋める穴を掘る手伝いをしてくれないか？」

状況は最悪だつた。福は信頼していた両親の死体を見たせいによる発狂寸前のパニック状態で、最終的に少年は一人で両親の死体を庭に埋めたのだつた。

少年は庭から外を見回す、銃器があれば強行突破も試みれるのだが福がいる。少年に福を置いてけぼりにする選択肢はない、ふうと息を吐きながら外を彷徨いているゾンビ達を見つめた。

「いつそ仲間になつてしまつた方がいいのかもな、うん」

電話も繋がらない、というか誰も出ない。親友であつたり親戚だつたり町内の範囲は誰も出ず町の外の知り合いには電話か繋がらないのだ。

「誰かが明らかにネットワークをいじくつていて、つていう考えはちょっと突拍子ないかな?うーん……」

少年にはそういう所業が可能な知り合いがたくさんいるためすぐに考えがそつちに向く、ちなみにそういう知り合いとは電話が繋がらない状況、まさに逃げ場もなく最悪の状況だつた。

「俺もそろそろ動こうかなあ……」

少年は咳きながらパソコンの電源をつける、と言つても居間にある家族共用のパソコンではなく自分が個人使用のために購入したパソコンであるためかなり使い勝手が少年にとっていいものとなつている。起動速度が異常に早いのが最大の特徴だと言えるだろう、そし

て通常のパソコンから潜れない深い所に潜ることが可能なのだ。

「病気、喰人、奇行、例事……薬品会社?なんだこれ?」

少年が自分で作った検索サイトの一一番上に出てきたのは外国の製薬会社のホームページだった。アンブレラ社、けつこう聞く名前だが何を作っているかわからないということでかなり有名だったはずだ。ひょっとしたら幽霊会社なのでは、という現実味のない噂がはこびるくらいに薄っぺらい会社である。少年はその会社に今回の事件の原因があるかもしれないと思いながらマウスを動かしクリックを繰り返した。

「……ビンゴ」

少年のパソコンはインターネットを開くと勝手にサイトのネットワークを遡ってハッキングをするように作られている、少年のパソコンのデスクトップには恐らくそのアンブレラ社の最深部であるどう情報がびっしり並んでいた。

「T・ウィルス、高速新陳代謝によるもたらされる肉体の死亡、絶えず発せられる電気信号による死体、胃液分泌の増進、それによって行われる喰人行為……か。これで全部なのかな?」

誰かが流したのだろう、生物兵器のような化け物の情報も完全に載っている。少年は悪魔の如き所業に吐き気を覚えた。

「なんなんだよ人間って……こんなに酷いことまでできるのが人間なのかよ……」

人類がみんな手塚治虫を読めばこんなことわ起いらすに済むのに、

そんなことを思いながら少年は町の外部にいる知り合いにメールを送った。

『アンブレラ社についての黒い噂、そこで制作されているウイルスについての詳しい情報の提供を求む』

「……相変わらず仕事が早いな」

数分ほどパソコンの前で座つていただけですぐさま返信が来る。メールを開くとこの数分でどうやって入力できたのか分からぬくらいにびつしりと書き込まれていた。

「抗体があるのか、ちょっとだけ安心……造れないかな?ん――無理だな」

デスクトップと睨み合いながらブツブツと独り言を呟く少年、とにかく明日から当分この状況が続くらしいということがわかつただけでも収穫だろう、少年は咳き終えると時計を確認する。時刻は午後4：00を回っていた、知らず知らずの内にかなりの時間が経過していたらしい。

「……寝よう」

時間的には早いが少年は眠ることにした、疲れ果てていち少年はあつさり寝むりに落ちていく。

「福……」

心配そうに妹の名を呼ぶ、当の妹は自分を嫌つてしまつてゐる現実にちよつと凹みながら少年は完全に眠つた。

真夜中にふと、何かの気配を感じ取つた少年はガバッと起き上かりて咄嗟に側に置いていた包丁を手に取る。耳をすませると気配の正体は庭へと繋がる窓から聞こえる音だつた。少年は両親の死体がまだ起き上がつたのかと思つたが庭は両親を埋めた時と何ら変化していない。どうやら家を囲むように作られているコンクリートの塀の外側から聞こえる音らしい。

「犬や猫が爪を研いでいる時の音に似ている…… そういえば動物にも感染するんだったか」

となると蚊や蠅も危ないのかもしれない。少年は今日行ったデパートにもう一度行く時は殺虫スプレー や武器になりそうなモノをかき集めることに決めた。

」
…
！
？

後ろから急に殺気のようなモノを感じ取つた少年はその場に伏せる。少年の背後からわずか2・30cm上空を何かの液体が飛び、カーテンにかかる。カーテンや飛沫が飛び散つた箇所は肉が焼けるような音を立てながらどうどろと溶けてしまった。

少年は背後の殺氣の正体が自分との距離を縮めてきたことを察知する。後ろを見ないまま前に駆けだしつつ窓の鍵を素早く開けながら庭へと逃れる。薄暗い夜の闇に紛れているが少年は背後から自分を

襲つた化け物の正体をおおよそ掴んでいた。

大型、酸性らしき液体、知り合いから送られてきたメールに載つて
いた化け物の情報と一致する。おそらく巨大な蜘蛛だ、だが正体が
分かつたところで対抗手段は皆無であるためとりあえず妙案が浮か
ぶまでは逃げの一手である。庭の物置の前など狭い場所を走り抜け
るたびにガラガラと家が崩れていく音が聞こえるがあまり構つてい
られない、生まれた時からずっと住んでいた思い入れがある家だが
命の方が大事に決まつている。背後から度々飛んでくる酸に肝を冷
やしながら何もないところで何度も曲がりながら走る。それだけで
もかなり追いつかれる危険は増すのだが地の利はこちらにある、場
所が少年の味方だった。

「……あつた！」

何で一般人の家にあるのか分からない巨大なツルハシ、人間の頭に
振り下ろしたら一撃で絶命させてしまうことを予測させる禍々しい
くらいに凶悪な狂器。ほとんど使われていないのか錆一つとして付
いておらず綺麗な銀色をしている。走りながら掴もうとしたがけつ
こうな重みがあり持ちながら走るのには適さないこと少年は知る、
それ以前に少年の足腰は今日だけでもかなり走り回ったせいでもう
限界が近づいている、それは少年が一番よく分かつていた。

「……だらあああああ……！」

ツルハシの尖つた部分を思いつき背後に向かって振り下ろす、ツ
ルハシそのものの重さも相まってか威力自体は充分だつたようで少
年の背後からドシャつ！という音と獣の断末魔のような奇声が聞こ
えた。少年はツルハシの重さに耐えきれず勢い余つて後方に一回転
してしまう、背後についた大きな何かに乗り上げてその上をじろじ
ろと転がりながらどさりと芝生の上に少年は転がり落ちた。

「たたた……！」

少年は驚愕した、余裕がない状況だつたため一切後ろを振り向かなかつたため自分の背後から迫つてきているのが巨大な蜘蛛の化け物であることは分かつっていたのだがまさか……

「ここまでかかったのか……」

少年の背後にいた蜘蛛はおおよそ3、4メートルを優に越す大蜘蛛だつた。ヒクヒクと明らかに弱つているのがわかるほどに弱々しく痙攣しているがメールの内容からするとT・ウイルスは特定の化け物には高い再生力を与える場合があるらしい、少年は大蜘蛛の脳天に見事に突き刺さっているツルハシを引き抜いてから大きく振り上げ、どごめをさした。

「しかしながら一般の民家なんかにこんな化け物が……？そもそもどうやつてここまで辿り着いたのかもわからないし……それに大きな蜘蛛の化け物って誰かが作らないと製造できないつて書かれてなかつたか？」

製造者が近くにいるとは思えない、少年は蜘蛛の死体にガソリンスタンドから盗つてきたガソリンをぶちまけながら考えたが後から後から疑問が湧いてくるため考えるのが嫌になつたため考えるのをやめた。わからないことは後回しにして少年はまず休みたかった。

芝生に燃え移つた火が大きくなつて危うく火事になりかけたが少年は家に燃え移りそうな火だけを消し止めた。おかげで庭一面が焼け野原のようになつてしまつたが蜘蛛の化け物を火葬できたからよしとしょづ。

奔走少年・狂奏曲（カプリッチオ）（前書き）

ベース的には今後もこのくらいで更新するはずです

奔走少年・狂奏曲（カプリッヂオ）

少年の脳裏には2つのことが常にあった、ひとつは福のこと。もうひとつはあの巨大な蜘蛛の化け物のことである。

「疑問、というより浮かんで当然なものか」

都内、この明らかにおかしい変化が町内に及んだのは今朝からだというのにウイルスによる進化が進んだ生物が出現するのはどう控え目に考えたっておかしいのだ。

「どこかに研究施設でもあるのか……？」

少年の抱いた疑問は至つて単純、この付近にあった研究施設のセキュリティか何かに不備があつてそろが原因で今回の事態、バイオハザードが発生したのではないかと推測を立てた。突拍子のない話のように思えるがそれが今のところ最も妥当な考え方だ。

「……近くにあるのかもしれないな、あんな大きな蜘蛛が歩き回っているのを発見できないのがおかしい」

ということは今後も人外のような化け物が出現、もしくは少年自身や福に牙を剥く可能性が高い。自分個人からなんとかなるかもしれないが福を守りながらなんて無理とかいうレベルじゃない。不可能だ。

「…………これから早めに手を打たないと」

とりあえず少年は「パートやスーパーでヘアスプレーを大量に入手、金属バットなども合わせて盗つてきたため武器には不自由しなさそうだったがどう考えたって飛び道具が不足している。銃器が欲しい」とびきり強力で扱えるモノ、少年は思ったがどうせそんなに都合よく手に入るわけがないのだ。そういうモノはきっと自分には扱いきれないだろうし……それに銃器の轟音が響いたら福に今の状況が知られてしまう。妹を失うことだけは避けたい。

「福だけは俺が守らないと……」

ある意味この戦場で最も哀れなのが福と言えるだろう、なにも知られないまま部屋で自分の世界に閉じこもつている様はこの状況からしても異様だ。福は両親が少年に殺されたと誤解したまだし外のことでもまだ知らないだろう、ラジオやテレビでこのことが放送されていないのもそれに拍車をかけている。

「…………それほどに大きな会社なのか？アンブレラというのは」

放送や放映を妨げられるほどの権限、そういう人間とパイプがあるのかも知れない。だとしたら個人の力で何とか出来る話じゃないのかもしれない、外部の知り合いにもそれほどの権力を持っている人間はいないから仕返しどかは考えられないだろう。まずは生き延びてからだ……

「とにかく郊外はまだ普通の町並みが広がっていることは確かなのなら……脱出しなきゃいけない」

福を連れて、部屋の外に出して事実を知らせなきゃいけない。福が信頼しきっていた両親が町中を徘徊しているゾンビに成り下がつていたことを少年自らが言わなければならぬ。地獄のようなこの状況を精神状態がボロボロの人間と共に逃走するなんてまるで難易度が高いクソゲーだ。容赦なく襲いかかってくるゾンビを素手で撃退しなければいけなようなものだ。

「とはいえた外部がこの状況を知らされていないってことはきっと今後も知らせる気はないはず、だとしたら……」

自分ならどうする？これが想定外のミスだつたら…どう考えたって揉み消そうとするだろう。当事者達からしたら不測の事態もいいとこだ。何をしても、どれだけの犠牲を払つても失敗という事実そのものをなかつたことにしたいはず。

それに対する最善策、少年にとつてむなくその悪くなるような光景が目に浮かぶ。核を使用しての殺菌を名目とした、恐らく報道においては原子炉がどうとか改算され地図の上からひとつずつ街が消える……それ以外でなら特殊部隊なるものの派遣という手段があるがこちらはあまりにも有利得ない、送られた資料を見る限りアンブレラが自ら望んでリスクを背負う会社だとは思えない。生存者がいたら救うどころか抹殺対象と設定するような会社だ。

「万事休すつて言葉がかわいく思えてきた……」

福は心身共に衰弱している可能性が高い、無理をして動かしたら…

…元々体の弱い福のことだ、ゾンビが追いかけてきても疲れたら足を止めてしまうだろう。そのためにはどう考へても付近にあると思われる研究施設を発見しなければならない。

「必ず脱出経路か緊急避難シェルターがあるはず……」

施設の設計者が実験失敗の際に発生するバイオハザードの可能性を無視しているはずがない、そこまで能無しだつたらそもそも設計自体任せていられないはずだ。

少年はようやく見つけた目標に向けて探索の支度を始めた。

「福、ちょっとお兄ちゃん外出してくるから部屋に入つたままでいろ」

人の気配はある、窓から逃げるような無謀な行為に走っていないだけ福はまだ冷静だった。少年はお膳に乗せた昼食をドアの横に置いて、返事のないドアの前を後にして家から出た。

ゾンビの数は明らかに増えている気がした。少年は両親が確実に死んだと思ったのに起き上がつたことを思い出した。どうやら何らかの改善策というかゾンビの弱点なり抗体を作るなりしない限りゾンビは増え続けるのだな、それは少年のような生存者にとって非常に厄介な件だった。

「ちくしょう、動きが早くないのがせももの救いか……」

危うくゾンビの尖った犬歯が少年の頬を掠めかける、ギリギリ触れるか触れないかという間合いでそれをかわした少年は返り血を浴びないようにゾンビの額に大振りな鎧を突き立てた。ゾンビは派手に出血しながらアスファルトの上に大の字に倒れながら周囲に血液を撒き散らす、それらを一切浴びることなく少年は走った。

「施設を隠せそうな場所と言つたら山奥に大きな家の地下、他には……片つ端から探せばいつかは見つかるか」

時々見かける犬のゾンビが厄介だつたがなんとなく少年はゾンビを相手取る際のコツをマスターし始めていた、返り血を浴びないよう一瞬早く、こちらの間合いに侵入してきた直後に急所を的確に切り裂く。武道の達人であつても完全に修得しきれないであろう高度なカウンターの技術を少年は齢17にして既に手中に収めていた。

「それにしても……数が多くすぎる！」

後から後から出現して自分に襲いかかってくるゾンビに少年もさすがに嫌気がさしてきた。これだけゾンビが多いという事実は生存者がいないという絶望的な現実に直結する、少年の脳裏に大して仲のよくなかったクラスメートの顔や心を許していた親友の顔が浮かんだが少年は感傷に浸ることなく走った。

度々建物に侵入してはゾンビに注意しながら内部を調べて次の建物へ、延々とその作業を繰り返しているうちに空が暗くなり始めてきた。

「……帰るか」

暗闇に答えはない、少年はそう呟き残念そうな表情をしながら来た道を引き返し始めたのだった。

「福、今帰つたよ」

ドアの前で福に声をかける、ドアの前には空になつたお膳が置かれていた。少年は少しだけホッとしてお膳を台所まで持つていった。

奔走少年・狂奏曲（カプリッチオ）（後書き）

優しいお兄さんに憧れているので主人公をこんな感じに仕上げてみました。

奔走少年・戦闘競奏曲（パトレ・カンターピレ）

少年の疑問、といつより不安は的中していた。町の中心から外れの廃工場まで内部を確認したが地下施設なる研究室は存在しなかつた。それどころかこの町からの脱出は不可能であることがわかつた、この町から出るための全ての道路や橋といった交通の弁は人が通れないようになっていた。

「自分達は高見の見物を決めこもうって算段かよ……ちくしょうー」少年は悔しげに乗り捨てられたのか運転手が発症したかで捨てられていた車のドアを全力で蹴つ飛ばす、それで現実に変化は及ばないということわ分かりきつていたがやらずにはいられなかつた。

「脱出機関、か……」

状況は最悪を通り越していた、丸腰で全裸で大人の熊と戦つて勝利しろといつくらいに無理不可能な事態に陥つていた。

「誰がどうしろと言つているんだ……」

少年は呟く、地下にそいつた施設がありそうな所を探し、なさそうな所も探した。大学、スーパー、民家に空き家……はたまた山奥。少年は一週間以上進展のない状況に苛立つていた。

「なんだつてんだ……」

少年はやはり悔しげに咳いた。

このままでは負ける、守るべき者を守れずに、いつかは力尽きて負ける。ゾンビの食い物にされていつしか福も……

少年は電池が切れかけているi-Podの電源を入れた。シャツフルで出た曲を聞いてから一旦家に戻つて充電しようと思った、もうそろそろ電気の流通もなくなるだらう。

チエルノブイリ・THE BLUE HEARTS 作詞作曲・真島昌利

誰かが線を引きやがる 騒ぎのドサクサにまぎれ
誰かが俺を見張つてる 遠い空の彼方から
チエルノブイリには行きたくねえ あの子を抱きしめていたい
どこへ行つても同じ事なのか？

(中略)

まあい地球は誰のもの?
砕け散る風は誰のもの?
吹き付ける風は誰のもの?
美しい朝は誰のもの?

「……行くか」

少しだけ元気になれた気がした。負けちゃいけない、個人の力で何か出来ると思うほど少年は自惚てはいないがそれでも僅かな人数のために大多数の人間が被害を被るだなんてコトはあってはならな

い。

少年の足取りは少しだけ軽くなつて自宅へと長い道を歩いていった。途中で運転が簡単そうな原付を発見してそれを使つた。足があると便利だと思った。

「福……？」

少年はしまつたと思った、福が家の庭に出ている。今まで福が部屋から出てこなかつただけでこれからも出てこないと思つてしまつた自分を殴りたくなつた。

「兄貴……！ れつてどうなつてるの？」

福はフラフラだった。その両足はしっかりと地面を掴んでいるにも関わらず福はフラついていた。

足下にはスコップ、掘り返された焼けた土、そして掘り返された両親の変わり果てた死体。

「福、落ち着け」

「落ち着けるわけないよ……さつき外に出たら意味のわからない怖い顔をした人に襲われそうになつた……それと最近の兄貴の不審な

行動が気になつて庭を掘り返したら……パパとママの死体が怖い顔をした人みたいになつてた

「……」

腐り落ちた顔を纏つていた贋肉、信頼し尊敬していた両親がゾンビに成り下がつてしまつている事実、福の精神はかなりグラついていた。

「そう言えればパパもママもおかしかつた、兄貴に殴り殺されるときも悲鳴っぽい声すら上げなかつたもんね。正氣を失つていたら全部説明がつく

福はゴホゴホと咳き込む、元から体の弱い福にとつて庭を掘り返すという作業はかなり負担のかかる作業だつたのだろう。それでも福は少年を正面からじつと見つめて一切視線を逸らさうとはしなかつた。

「話して、兄貴の知つてることを全部

「福……」

「大変なんでしょう? だつたら人数が多い方がいいじゃない。今のはこんな状況だけ……もう少ししたら体調も整うはず。だから

福はおぼつかない足取りで少年の下に歩み寄る、少年は自分の妹がこんなに逞しくなつていたことを初めて知つた。

「私も知りたい、私達が置かれている状況について

「……生半可な覚悟だったら死ぬぞ」

少年はわざと真剣な面持ちで自分の妹に言った。

奔走少年・第四楽章（フォーススタイル）

福が言うには両親には少年には知らない側面があつたらしく、一人だけでヒソヒソと話していく福が来たらパツと話を止めることが多く福は「まさか自分は本当はこの家の子じやないんじやないか」「などとバカな妄想に頭をくゆらせていたのだが福が言いたのは決してそういうことではないのだ。

「町中のどこを探してもなかつたんでしょう？研究施設的なそういうの……」

「ああ、だからあとは手当たり次第に地面とかをしらみつぶしに地下探しつてコトになるだろうな」

「……ひょっとしたら」

「何がひょっとしたらなんだ？」

「すゞく小さい確率、低くて低くて、米粒までにしか満たないくらいに小さい可能性だけで私はその場所を知っているかも知れない」

少年は驚愕する、今までこの最悪な事件が降つて湧いてから全く外に出るなどの情報不足もいいところな状況にあつた福が自信ありげに言つ様はかなり意外だった。

「あくまでも可能性だけど……」

福の推測した場所、そこを兄妹は探す。繫がつている場所、脱出経路へと繋がる希望。笑うなら笑うがいいと言わんばかりになつて二

人は自分達の家の中で捜し回っていた。

よくよく考えたら両親の行動はおかしいところが多かつたと禍は言った。なんだか常にコソコソとしていてその上さつきまで家にいなかつたはずなのにいつの間にか家にいたりいなかつたり……。禍が二人しかいない時に居間へと降りるところぞつて何かを隠すような動作を見せていたという。まあ、観察力のある禍だからこそ気づいたのかも知れないが、だとしたらここ以外に目的の場所はない。

「……あつた」

「こんな大きい箪笥を置いた、ってだけで誤魔化され続けてきたわけか俺らは……」

「私だつて両親と仲良くしてたのにこんなに大きなコト全く気づかなかつたわよ、隠し上手というか私たちがバカなのか……」

「たぶん両方だな、悔しいが両親がこの近辺をこんなことにした張本人だつてことは間違いないんだろうな」

「……それにしても地下に部屋があつたなんて」

倒された箪笥に隠されていた部分にはドアがあり、それを開けると地下へと続く長い階段がありの先にはただ真っ暗なだけの道が続いていた。少年にはその階段が巨大な怪物が口を開けて獲物を待ち構えているようにも見えた。禍も似たような思いを抱いていたが二人は決して口には出せなかつた。

口に出したら弱気になつて、何もかもが頓挫してしまうよつた気がして二人は何も喋れなかつた。

「もう行くか?」ここに部屋があるつて分かつた以上別に焦る必要はないと思うが

「……でも武器らしいものは精々ツルハシとかくらいでしょ?あと

は可燃性スプレーとライターで即席の火炎放射器くらいだし別に躊躇する必要はないんじゃないかな?」

それとも兄貴怖いの? 福が無意味に挑発するよつて言つたのを目の当たりにして少年は少しだけむつとしたが確かに自分に臆病な面があつたことは否めない。少年ははんつと自嘲的に笑つた。

「逃げ回つてばかりですっかり逃げ腰が地についたやつたなあ……」

「言い訳? 兄貴が臆病だなんていつものことじゃない。お父さんからもお母さんからも逃げてたじやん」

「逃げてた、か。案外そうなのかもな。ちょっときつく言われただけで突つかることさえしなくなつたもんな……」

少年は小さく笑いながら階段を下り始めた。

「あつ! ちょっと待つてよ! 一人で行く気! ?」

「怖いんならついてくることねえよ。別に俺一人の方がたぶん楽に動けるからな」

「ああ! それって私が足手まといつてこと! ?」

「分かつてるんならいいじゃねえか」

福はむくれながら少年のあとを走つてついてくる。少年はつい数日前までだつたら絶対にあり得ないであろう光景に、自分が地獄の中にあるということを忘れて少しだけ笑顔を見せていた。

このあと襲いかかつてくる、凄まじいまでに壮絶な地獄が待ち受けているとも知らずに、笑つていた。

奔走少年・悲喜劇（狂おしいほどのカタルシスをあなたに）（前書き）

ちょっとグロテスクな描写が多めですので苦手な方は「遠慮ください」

奔走少年・悲喜劇（狂おしいほどのかタルシスをあなたに）

真っ暗な階段を降りるとそこは地獄絵図だった。壁には大量の血肉がこびり付き床にはその分のB・O・Wの死体が散乱している、当然の如くまともな形を保っているものは一つとしてない。床に散らばっている死体は全て何分割かはされていた。

「なにかいるみたいだな」

「どうしてそういう思うの？」

「見てみろよ、箇所を問わず死体にはほとんど似たような傷がたくさん付いてる。引き裂かれたどつかは知らんが……ほら」

少年は死体の一つを恐れることなく持ち上げて禍の顔に近づける、禍は少年とは違つてかなり顔を遠ざけるようにしながら緑色のゴリラのような化け物の首もと当たりを凝視した。

「……ほんとだ、千切られたみたい」

「たぶん、いる。」この先にこいつらをこんなにした規格外の化け物が

「お父さんとお母さんは、失敗したのかな？ その怪物を造り出すことに」

「失敗……というより暴走だらうな、これだけ危なっかしいのに暴走されて殺傷されて、それから感染してゾンビになつて蘇つた。一番妥当な考えだな」

少年は顔色一つ変えずに言つたが禍は少し顔色が悪い、やはり慣れていないためか恐怖で表情が引きつっていた。

「やつぱり禍は引き返しておくか？ 僕が先に行つて安心かどうか調

べてから来た方が……？」

「……ううん、私も行くよ。兄貴にばかり頼つてたらダメだ。ダメなんだ……」

「そうか、じゃあいくか」

二人は僅かにぼんやりとした灯りに照らされた通路を進んでいった。

「なんだか暗いな……足下気をつけろよ」

「分かつてること今のところ兄貴の輪郭しか見えない……」

「どつかに電気の操作ができる場所があると思うんだが、つけたらつけたでけつこう危ないだろうし」

「何言つてんのよ、このまま真っ暗なままだつたらそっちの方が危ないわよ」

「そうだな……よし、脱出経路はあとで探すとして今は何とかしてブレー カーみたいなものを探すことに専念しよう」

二人は手当たり次第にドアを開けて回る、20分程度で地下施設の電気を付けることに成功はしたのだがいろんな部屋に入る度奇妙な姿をした死体に二人はさすがに意氣消沈してしまった。

2メートルは優に超えるかぎ爪をもつた人間に近い体をした化け物に床にたくさん散らばっていた緑色のゴリラを一回り大きくして色も真っ赤に染めたような怪物の大量の死体、少年を襲つたものよりも大きい蜘蛛の死体など、それらが全て死んでいた。

「なんだかさすがに俺の足も重くなってきたよ……」

「こんなことが現実で起こりうるなんて……」

極めつきは凄絶だった、メインの研究室と思われる場所には大量の紙の束と大きな水槽が置かれていたのだがその水槽には水は一滴も入ってなかつた。いや、入つていたのかも知れないが大量の血液で真つ赤になつていたため何も分からなくなつていた。

水槽の中には人間のものもあつたがそれ以外にも化け物の手足と思われる肉の塊がフヨフヨと浮かんでは沈んでいる、細かく千切れた肉片は酸素を送り込む機械の発している泡の影響で水中を縦横無尽に巡つっていた。

「……何か探すか」
「そうね……」

散乱している紙を拾い集めて調べてみると少年が外にいる知り合いから送られたものとほとんど同じものだつた。その中には『新作』『断念』『完成間近』などサインペンで殴り書きされているものもあつたが少年にはその字が両親のものであるという確信があつた。

「やつぱりあいつらがこんなことを……」

福はボーッとしながらもなんとか紙に書いてあることを調べてはいる、だがあの様子だとこれが両親の字とは気づかないだらうし重要な情報を見逃してしまいそうだったので少年は福に休むように言う。福はあまり抵抗することなく従つた。

「『タイラントキング』、『レッキング・チャード・ビル』、『暴君王』、『劣等生』、『人形』、『クインテット』……こんなにたくさん製造して生物兵器にでもして売り出すつもりだつたのか？」

少年は必要な資料だけをカバンに仕舞う、あまりにも突拍子のない

資料だとマスコミに公表しても信じてもらえないだろうし……そもそもこの事件 자체ほとんど外様の連中は知らないのだから何らかの偽情報を聞かされている可能性が大きい、それ以上の証拠を掴まないとこの事件を広く認知させるに足らないだろう。

「……ん、なんだこりや？」

少年が見つけたのは自分と禰の写真がクリップで止められている二つの資料だった、いずれもだいぶ前に撮影されたものであることは一目瞭然なのだが少年はあまりそんなことを気にすることなく自分の写真が添付されている資料を取り、目を通した。

Name: M(じ)から先は血で汚れていて読めない)

息子の遺伝子をベースにして作製、遺伝子の基は洗濯物に付着していた髪の毛を使用した。

結果的に実験は成功、成長を早めた。息子が10歳だった頃の外見にまでは無事成長、肉体強化のためにT-ウイルスを投与した際に体が耐えきれず血ヘドを吐き散らして意識不明に陥る。危うく暴走を始めそうだったがニュータイプのハンターのテスト対象として使用、死亡。失敗。引き続き妹の禰の方に尽力するとする。

「……妹の禰？」

「呼んだ？」

福が少年のところに歩み寄る、少年は自分の写真が添付されている資料を福に渡すと今度は福の写真が添付されている資料を手に取つた。

N a (ここから先はほとんど血で汚れていて読めない、数カ所のみが読可能)

最高傑作じ……今までの……絶対に……今後の市場の……成功……

(上記とは違う日付のよつたなサインがあるがこれもあまり読めない、斜線を挟んで数字が書かれているようにしか見えない)

失敗……殺され……全部死んでしまつてもう全……助け……たくな
い……生きたい(これから後は血で汚れていて読めない、この資料
における読可能な部分は以上である)

「……どうやら予想以上に嫌な展開だなあ……」
「あつ・児貴。これって私たちが探してたやつじゃないかな?」

少年が福の座り込んでいた所に行くと『緊急脱出用地下列車』の文字が書かれている紙があり、それはこの部屋の状況からすると奇跡的にきれいだった。

「地下3階……東棟? そもそもここは何棟なんだ?」

「分かんない、とりあえずまだ私たちは一階も階段を下りてないし下つてみるのが今のところ一番良い策何じゃないかしら？」

「そうだな……階段を探していればここが何棟かも分かるかも知れないわけだし」とりあえずまた歩くか

一人はそう言つて歩き出した。歩き出してから少ししてここが西棟であることを知る、とりあえず地下3階まで降りてから東棟への道を探そうとこことになり階段を探し続けた。その間、生物には1匹として出会わなかつた。

「本当に皆殺しこそされたみたいだな……」

「こんなことできる怪物と同じ空間にいるってだけで気分が悪くなつてきたよ……不安で堪らないよ、兎貴は怖くないの？」

「怖いに決まってるだろ、なんでそんな分かりきつた質問するんだよ」

「だつて兎貴汗一つかいてない」

「ん？ そう言えばそうだな、けつこう涼しいし冷や汗くらいはかいでもいいものかなとは思うけど」

「話逸らさないで、兎貴だつて私の言いたいこと分かつてるでしょ？」

「……」

少年は沈黙する、妹の福がこんなに察しが良いというかここまで洞察力に長けていたとは想像にも及ばなかつた。少年はふうと大きく息をつきながら福の方を向いた。

「とりあえず福の方から言つてくれよ、あり得ないとは思つが福と俺の間で考えの食い違いがあつたら面倒くさいことになるからな」

「……まだ確信が持てたワケじやない、なんとなくだし私は兎貴と

はあまり口をきいてなかつた時期があつたからその間に兄貴がどんな連中と連んでいたかも知らない。全く予想が付かないけど……兄貴は「こういう状況に慣れている気がする」

福は確信が持てない、自信なさげな様相とは裏腹にはつきりと少年に物を言つ。少年は待ちに対してふふつと小さく笑いかけた。

「まあな、多少だがこういう人外に等しい連中と連んではいた。いろんな物を盗んだり偉い輩や芸能人の私生活をおもしろ半分で流出させたり、知り合つた経緯は説明が面倒くさいから言わないけどな」「……」

「胡散臭いって顔だな、言つておくけどこの事件の大まかな真相を掴めたのは外にいるそいつらに頼んだからなんだぜ？ここから脱出できたら紹介する、っていうかお世話になると思うから仲良くしろよ」

「やだ」

福は短く言葉を切つて一人で勝手に進んでいく。少年は何だかよく分からぬ福の心中を察しようと考えたが男の自分では無理だと分かつたためまた小さく笑いながら福の後を追いかけることにした。

奥に行けば行くほど濃くなる血の臭い、一人は顔をしかめながら灯りが小さくなつていく通路を歩き続ける。空気もかなり湿気を含んだそれとなり呼吸も困難になつていった。

「肺に水が溜まつてゐる見たい……」

「安心しろよ、本当に溜まつてたらとつぐの昔に死んでるはずだから」

「例えばの話よ、冗談が通じないわね」

「あまり器用じゃないんだよ、人との『リラコ－ケーション』なんぞ取
れなくとも生きてはいけるんだから」

「それじゃあ今後の生活に田を向けている余裕はなさそうね……な
にこれー?」

二人の田の前に入ってきた光景は文字通り血の海だった。地下へと
繋がる階段が大量の血液が浸水して通れなくなっていた。まるで大
海のようにザブザブと波立つていて血液を見ていた禍はその場にへ
たり込んでしまった。

「これは……何なの!?

「分からん……ただこのルートから東棟に行くのは不可能つすこと
と地下には流れほどの血液を持った何かを殺せる何かがいるってこ
とだけだ」

「……!」

禍の絶句は妥当な物だと思える。少年は禍を少し強引に引き起しす
と頭をクシャクシャと撫でた。

「安心しろ、とは言わない。だが幸い東棟へ通じる道はあるわ
けだし列車がどうなってるかは分からんがおそらくこれだけの施設
だ、地下水の浸水のためにシャットアウトショルターくらいなら持
ち合わせてるだろう」

「…………?」

「まだ希望はある、俺たちはまだ生きていて微かではあるけど可能
性がある。ここから脱出できる可能性がな。やれるなんならやらなき
ゃ損だ」

まずは引き返せり。それで少年は禿の手を取つた。禿はあまり弱いところを見せたくなかつた兄に女の子な部分を見られた恥ずかしさのためか少し顔を赤らめた。

「言われなくても分かつてゐるわよー。」

禿は勢いよく立ち上がつた。少年はやはり小さく笑つた。

奔走少年・悲喜劇（狂おしいほどのカタルシスをあなたに）（後書き）

怖い……書きながら一人の置かれている状況を想像して鳥肌が立ちました

奔走少年・Immortal Flower（不死身の花）

突然だった、少年の足はなんらかの負荷によって強引に止められた。

「…………」

背筋が『ぞわつ！』とした、親しくしていた親友にいきなり絶望と
いうナイフを眼前につきつけられたかのような、少年にとってそれ
くらいの寒気が少年の中から歩むという手段を強奪した。

「？兄貴、どうしたの？」

禍は気付いていない、少年の極限までの危機状態に何度も置かれた
ことで研ぎ澄まされた本能でもって、ようやくそれを察せられたの
だ。少年は反射的に禍を自分の背後に引き込んだ。

迂闊だった、凄まじい量の死体を口にし続けてきたため思考が明らかに鈍っていたのだと少年は唇を噛む。いくら大量の死体が転がっていたにしても、それは怪物達が全滅したという証拠にならない。
知っていたはずだ、自分の口で禍に伝えたといふのに少年はすっかり頭の隅っこにそれを追いやってしまっていた。

「セヒニ、いる……！」

この研究施設内部の魑魅猛靈の如きB・O・Wを独力で葬り去つた、規格外中の規格外の存在。生態系の頂点に立っていたはずの人間をいとも簡単に引きずり下ろせるであろう、頂点どころか天空に君臨する絶対王者。

「下がれ……！」

なにがなんだかわからないという表情の禍をさらに背後にやる、持つていた巨大ツルハシを振り上げたが少年は勝てるはずがないことを悟りきつてしまっていた。

わかる、曲がり角の向こう側の『それ』は強いと。まるで軍隊を相手にしなくてはならない、個人で軍隊のような戦力を持ち合わせた化け物。少年はその存在を目にするよりも早く臨戦態勢に完全移行した。

「伏せてろ！」

『何か』は今にも角を曲がってこちらに姿を見せようとしている、少年は視界に入れただけで自分が絶命してしまうのではないかとう狂信的な恐怖にとらわれていた。とにかく時間を、最低限逃げる時間を稼ぐだけでもと躍起になっていた。

改造した噴出力と可燃性の高いスプレーと火力最大に設定されたライターを素早く取り出す、禍が兄の突然の豹変に驚いて呆けていると目の前が豪火で覆われた。

「う、うわあああああ！」

少年の視界もほとんどなくなってしまった。だが少年は完全に我を失っている。自分の背後から聞こえる福の悲鳴も意に介することなく豪火で通路を焦がした。転がっていた死体が灰燼になつたのを確認してから少年はスプレーを止めた。

「はあはあはあ……」

「あ、兄貴……なにがいたの？」

「も、もう大丈夫、かな……」

ブスブスと嫌な音を立てながら上がつてている煙が一人の視界をまだ覆っている。肉の焼ける嫌な臭いが充満していく福はうつと息を詰まらせたが少年が気になつてているのはもっと別のことだった。

少年の短期間で半強引に研ぎ澄ませられた本能は一向に全身に鳥肌を立たせて臨戦態勢を説くことしない。少年は素早く福の口に手を当てて黙らせると自らも息を殺して聴覚を鋭利にする。

……ペタ。ペた。

裸足の足がリノリウムの床を歩いている音が確かに聞こえた。少年は咄嗟に福を抱きかかえると背後にある角まで走つて福をそこに下ろした。

「いいか、俺が出てきてもいいと言つた時だけここから出ろ！俺が死んだら隠れて『アレ』をやり過いしてからどうにかここから脱出するんだ！」

「う、うん。わかった……」

「絶対だぞ！」

少年は走つてさつきいた場所まで戻る。ペタペタとした裸足の足音は少年の耳にとてもゆっくりに聞こえた。

足が震えている。

いや、足だけじゃない。震えているのは全身。震えてない部位は存在していない。それでも少年は全身に力みを入れて全身の震えを押さえる。自分の背後には守るべき妹がいるのだ。ここから自分が恐れをなして逃げ出したらどんな仕打ちを受けるのだろうか……それを思つと恐れは少しだけ薄れた。

野性的な本能。少年は僅かな気配のぶれも見逃さないようじて目を見開きながらツルハシを脇に置いて刃渡り25cmのアーミーナイフをしつかり握り込んだ。

ペタ……

炎も收まり、煙が徐々に晴れてくる。足音も確実に近づいてくる、少年はアーミーナイフを大口径の拳銃のよつて堂々と見えない敵に突きつけた。

「来いよ……絶対に死なねえから

少年の目に煙でぼやけた何かのシルエットが映る、アーミーナイフを握り込む少年の手に力が入って汗が滲んだ。足に力が入る。

「……？」

少年は目前の光景に目を疑いながら、舌打ちをした。

「やっぱりかよ……！」

少年の目の前に突如現れた足音の持ち主は福によく似ていた。いや、瓜二つだった。

奔走少年・停止（奔走終了）（前書き）

奔走少年、今話で最終話です。

奔走少年・停止（奔走終了）

現れた人外の化け物の姿は福によく似ていた、というより福に瓜二つである。

「あの両親（バカ二人）は本当に俺たち兄妹の遺伝子で実験してたつてわけか……」

人間としての禁に自分達の子供を介入させる、親としてあるまじき業だったが今はそんなこと言ってられない。目の前にいる化け物は地下に存在している同じような化け物を独力で全てほふった規格外なのだ。

しかし、化け物はきょとんとしていた。その場から一切動くことがなく興味深そうに少年の顔を覗き込んでいる。

「……遺伝子的なシンパシーでも感じてるのか？」

完全に妹の遺伝子をベースにつくられているであらうそれの肌の色は灰色だった。体の所々からは突起や棘が飛び出しており触れただけでも重傷は免れないとわかる、だがそんなもの使わなくても万物を殺傷し得るだらうと少年は感じていた。

手足が異常に太く、筋骨隆々としているのだ。ボディービルダー程ではないが明らかに外見よりも内側の筋肉を意識されているとわかる肉付き、無駄がほとんど見当たらない脂肪の薄さや締まっている筋肉の具合は武道の達人を思い起こされる。

しかし、それでも人型をしているが人とは到底思えない異色の存在感。それは圧倒的な支配者が放つそれのように少年の体を圧迫していた。

「立つてられねえ……」

体を支えるだけで精一杯、少しでも力を抜いたら氣絶するなりで尻から床に座り込んでしまいそうになる。それでも少年がなんとか自我を保てていて化け物と相対できているのは自分の後ろには襷がいるからだった。

自分が後ろに恐れて歩を進めてしまうだけでも、襷に降りかかる危険は増大する。怯えでもしたら簡単に一人とも死んでしまう。そう考えると足に勇気に似た力が源ぎつてくる、負けられないという思いをますます強くする！

「来いや化け物おおおおーーー！」

勝負はよくも悪くも一瞬で決まる、少年はそう思つてゐる。

二人の間にある実力の差と云うのは数字などでは表しきれないくらいのものであつて少年が負けるとしたら間違いなく瞬殺だらう。

だが、一瞬という意味合いなら少年にも僅かながらだが勝機はある。それは僅かと称するのも憚つてしまふくらいに矮小なものだが少年には最終兵器と称するに値するツルハシがあるので。

少年は脇にあるツルハシを掴み、振り上げながら化け物に突つ込ん

でいく。少年に見入つていった化け物はそれを確認してから自らも突つ込んだため反応がかなり遅れた、だがかなりと言つてもそれを時間にして表すと0・2秒にも満たない。瞬きしていたらあっさり過ぎていつてしまうくらいの短さである。

だが戦闘という行為の際に、それはあらゆるスポーツにも通じることだがそもそも隙を見せてしまうということ自体犯してはいけない失態なのだ。誰にでも誰かに怒られた経験はあるだろうがその時に余所見をしていたら確実に怒鳴られる、何か一つのことに集中しなければいけない時に他のことに意識をやつてしまったらそれ相応のリスクがかかるのだ。

ましてや、少年は禍に似た化け物が屠つてきたB・O・W・とは明らかに違う。本能的な捕食を試みるために襲いかかるのではなく本気で殺しに来ているのだ、根本的な意味合いで決意も意思も段違いである。

上乗せするように化け物は真剣な相手と交戦していない、経験がないのだ。殺し合いという、命を奪い合う冷たい刃を互いの首筋に当て続けるような緊張感が化け物には皆無なのだ。

もちろん少年の全身には緊張感が満ち溢れている。緊張は研ぎ澄ませるほどに集中力に変わっていく、例え化け物が少年にとつてどれほど想定外の動きを見せたとしても少年は凄まじい実力差をも簡単に覆してみせたことだろう。

少年が真つ当な人間でありながらこんな地獄のような状況でありながら生き延びられたのはそういうたずば抜けた集中力があつたからだつた。動きが遅いとはいえ大量のゾンビの歯牙から逃れ続けれた

のは全速力で走りながらも切つ先三寸の回避が可能な集中力があつたからなのだ。

社会から摘み出され、はじき飛ばされた少年の隠された能力。両親でさえも遺伝子情報からでしか、数字からでしか見ていなかつたため分かることなく死別した。

少年本人にもあまり自分に飛び抜けた能力があるなどという自覚はなくただ闇雲に突っ込んだだけ、ツルハシを振り上げながら振り下ろしにかかるだけの行為。

ただこれだけ少年に有利な要素があつたとしても「元来」一人の間にはどうやつても埋められない深さの溝があることは明白で、少年はこれで勝率を0%から20%に上げた程度。それでもこの大ツルハシを化け物の頭骨にたたき込めば、さすがにただ事ではない。それを含めたら25%、これでようやく4分の1にまで持ち込んだわけだがその勝率を保つためには『少年の攻撃が先に当たらなければならぬ』といつ非常に理不尽なくらいに困難な条件が前提となる。

だが少年には曲げられない信念があつた、ただ一人の肉親である妹を守るという使命感に燃えていた。岩をも貫かんとする頑強な精神は自分がアリに見えてしまうくらい強大な敵に躊躇無く飛びかかるせた。

ବୁଦ୍ଧିମତ୍ତା କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାକୁ ବନ୍ଦ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାକୁ ବନ୍ଦ କରିବାକୁ ପାଇଁ ଏହାକୁ ବନ୍ଦ କରିବାକୁ ପାଇଁ ।

少年の振り下ろされるツルハシ、迫つてくる化け物の手。少年の矮小な体など化け物の小指の先がかすつただけでこの世から消え去つ

てしまふことだらう。それでも少年の動きには攻撃の意思しかなかつた、鋭く凶悪な切つ先と化け物の手が交錯する。

ザシユツ！

血と脳漿と灰にまみれた通路にさらに赤色が加わる バタバタッという血が降り落ちる音が響いて決着を知らせた。

切つ先三寸をギリギリで回避する少年独自の土壇場の集中力は自分のツルハシよりもはるかに早く自分に到達するはずだつた攻撃を躊躇していた。

振り下ろす過程でツルハシを咄嗟に右手に持ち替え、半身になりながらツルハシ自身の重さに任せた超重量級の一撃が、化け物の脳天に炸裂していた。

化け物はそう簡単には地面に倒れ伏さなかつた。無表情のまま数秒ほど少年を凝視してから、それから床に倒れ込んだ。

「はあはあはあはあ……」

怖かったという正直な感想を述べる気力さえ残つていなかつた。他から見たら完全なる少年の読み勝ちのように見えるが少年からしたらあの瞬時の動きはただの反射的な行動であつていくつかの偶然が偶然に重なつただけ、ただの奇跡である。

少年はそんな風に余韻に浸つていると化け物の体がまだひくついているのに気づく、少しだけびくつとしたが普通の人間同様に頭部には脳かはわからないが重要な機関があるらしくほとんどの虫の息である。だがこのまま放置していたら甦りかねない。

「……うん、殺しておこう」

それに禍が見たらショックを受けかねない、化け物とはいえ自分と瓜二つな顔をしているナニかが目の前で死にかけていたら心中穏やかではないだろ？

少年はツルハシを何度も大きく振り上げては化け物の頭を碎いていく、頭を碎していく課程で度々化け物の体が跳ね上がつたが少年に戸惑いは見られなかつた。

頭の原型がなくなつてから今度は肩や足にツルハシ降り下ろす、何度も、何度も。自分達を追いかけてこれないようにな。

「福、出てきていいぞ」

福は出てみると脇田もふらずに少年に抱きついてきた、いきなりのことと少年はかなり驚いたが福が怖がっていることを察して頭に手を置いた。

「よかつた……生きててくれてよかつた……」

「死なないよ、福だけを残して死ねるわけないだろ?」

「でも本当に怖かった……兄貴にもう会えないんじゃないかつてずっと不安だった……」

「よしよし、もう大丈夫だからな。もつあとは非常脱出用の電車を見つけるだけだから」

「うん……お化けは?」

お化け、かわいらしげ響きに少年は吹き出しちまつ。やつぱりこの状況でも福は福だった。

「逃げられた、でも大丈夫だよ。致命傷は負わせたから」

「そう……大丈夫かな?電車とかに襲いかかってこないかな?」

「まあ、大丈夫だろ。フラフラだったし動くのも辛そうだったから」

「ふうん……じゃあ急いで。これ以上ここにいると鼻がおかしくなっちゃうよ」

「そうだな、早く行こうつか」

福は少年の手を引きながら地図で現在地を確認する、床にある真っ赤な血の痕跡にチラッと視線をやつたがたぶんどこか兄が負傷を負わせた際にできたものだろ?とあまり気にしなかった。

その痕跡が化け物であるとは、当然氣付かなかつた。

それから一人は地下鉄にある電車を発見して無難に街から逃げ出した。到着した場所はどこかわからない駅だつた。

「廃駅つてやつか……使われてない駅かな？」

「そんなのあるの？」

「あるらしいぜ、ただの都市伝説だと思つてた」

「都市伝説？」

「路線からはずされた駅だよ、ただあるつてだけの話だつたけど…

…」

寂れていで、長いこと使われていないのは明白。ぼんやりとした灯りは所々にしかなく薄暗い、とにかく階段を上がろうと「こう」とになつて一人で近くの階段を上がつた。

「……映画のロケかな？」

「わからない、ただわかつてることは俺たちはまだ事件の渦中にいるつてことだけだ」

階段を上がつたところにあつたのはボロボロになつてゐる研究施設

だった。それも一人の家の地下にある研究施設のよつに荒れ果てていて人の気配さえしなかつた。

「……兄貴」

「なんだよ」

「これが地獄つてやつなら大したことないんじやない？」

「まあ……つい数時間前までもつと酷い状況に置かれていたからな」

「じゃあ、兄貴。頑張つて生き延びよう」

「いやあ……さすがに俺は疲れてるんだが……かわいい妹のためだ、もう一肌脱いであげよう」

「ははっ、兄貴とその友達の腕の見せどころじやない」

「友達か、そろそろやつらの力も借りないとな。さすがにしんどい」

少年はチラッと視界の端に研究員の姿をしたゾンビが入ってくる、どうやら前の場所とは違つてゾンビで散乱しているらしい。

「はあ～、また走るわけね」

「外に出てからがもつと走るぞ」

少年はそう言って、カバンから大振りのアーミーナイフを構えて走り出した。

奔走少年

Fin.

奔走少年・停止（奔走終了）（後書き）

どうも、makiです。バイオを久々に書けてけつこう楽しかったです。

これからも「れぐら」の長セの話をいくつかあげていこうと思つてますのでこれからもよろしくお願ひします。

新シリーズはもうちょっと待ってくださいね（^-^）

レポート・予告（前書き）

お久しぶりです、かなり長いことほつたらかしにしてしまってました

レフュージア・予告

「バカだ、バカが一人いる」

レフュージアは「ヤリと笑つてバカ一人をこの世から消し去る、高速の一撃に新たなバカは怯え、その場から逃げる。

「そう、それでいい。そして俺の前に一度と姿を表さなかつたらなおいい」

レフュージアは気取りながら銃をクルクルと回しながら腰にしまう、その背中を見た者は溢れ出てくる驕りに似た強さを感じたことだろう。それくらいにレフュージアは強いのだ。

「……暇だ」

レフュージアは暇そうに廃墟となつてゐる世界を歩く、だけ一トから頑強な体を持ち合わせてゐる彼には壊れた地球を徘徊して回るゾンビなど取るにも足らない存在にもならない。銃など使わなくても素手で十分戦える、そう思つていた。

だが、これよりの数日で彼の価値観は大きく変わつてしまつ。

自分の力が及ばないこともあるとこつことを知つた強者は、眞実にどう向き合つのだろうか……

レビュー・予告（後書き）

この話はあくまでも予告であって、本編は作者の気分とかでこぐらか内容が変わるかもしれません。

レフコージア・沈黙する世界（前書き）

「」からが本編です

レフュージア・沈黙する世界

レフュージアが世界が混沌としていることに疑いを持つことはない、彼にとつて今の世界は自分が生まれてきた頃からこうなつていて、そうであることが当たり前なのだ。そうであることに理由はいらぬ、どうしてこうなつてしまつたのかを細かく考えることなど、フランス人に「どうしてあなたはフランス語を話すのですか?」と聞くに等しいとまで思つてゐる。

そんなレフュージアは自分の強さに絶対の自信を持つてゐた。外を徘徊している死人共に負ける要素など自分にはないと思つていたしましてやハンターなどに殺されることもないと思つてゐたのだ。

実際、レフュージアは強い。人間離れした身体能力は不可能に思えるくらいにアクロバティックな戦闘を可能にしており、レフュージアが戦つてゐる様子はやく「蝶や蜂のようだ」と例えられる。

早く、正確。大量の死人の迫りくる無数の触手のような腕を難なくスルスルツとかわしながらバタフライナイフや銃で的確に死人やハンターを殺傷していく。首を切り落とし、脳みそをぶちまけさせる様子は蝶や蜂というよりもスナイパーと称した方が合つてゐるかもしない。とにかくレフュージアの強さは人間離れしてゐるということを理解してくれればいいのだ。

「……退屈だ」

レフュージアはいつもそう呟いてゐる、いくら死人を淘汰してもレフュージアは自分の心中が常に何かを渴望してゐる感覚を覚えるのだ。その物足りなさつたらない、意味のわからない、大したことの

ない我慢を延々し続けていようとつのものなのだから真綿でずっと首を絞められているに等しい。

レフュージアはそんな意味不明な感覚に対しても常にイライラしていた。イライラする、とにかくイライラするのだ。レフュージアはそれを振り払いたいがために刺激を求め続けていた。

「もっと強い相手と戦いたい……」

まるで某人気少年マンガの主人公のような台詞だがそれこそがレフュージアの本心だった。RPGでもレベル上げなどとかいう理由があつたとしても弱いモンスターを倒しているだけではつまらない、多少は倒しがいがある相手と戦いたくなるのは当然のことと言えた。

「……またか……」

レフュージアの背後数メートル程の位置に何かが近づいてきている、抑えることなく撒き散らしている殺氣からして間違いなくハンターである。

「……」

レフュージアは懐に入っている大振りのナイフを取り出して固く握り込む、それからレフュージアはいつものようにハンターが自らノコノコと自分の領域に入ってくるまで目を閉じて待つ。

「……」

どうやらこのハンターは用心深いらしい、普通のハンターならば背後から近寄つてくる場合、一つ飛びで相手に襲いかかれる範囲に入

つたらその人間の首など簡単に切り裂くことができる鋭い鉤爪で襲いかかってくるのだが、レフュージアが今背後で相対しているハンターはかなり離れた位置にいるまま動かない。まるでレフュージアを監視しているようだった。

「……何がしたいんだ?」

どうやらハンターは自らモーションをかけてくる気はないらしい、それを察したレフュージアは首だけを動かして背後の様子を伺つてみた。レフュージアの背後は広い岩場となっていて大きな岩がたくさん、無造作に並んでいる。レフュージアはハンターがどこに隠れているか、正確な位置まではわからないのだがとにかく自分の視界のどこかにいることはなんとなくわかつてはいた。

「……しまったな」

レフュージアは後悔した。どうやら背後にあるハンターは囮だつたらしく、いつまでもモーションをかけてこないハンターに気をとられている間にレフュージアは自分が囮まれていることに気付いた。

「まだまだ未熟だな……退屈の味を覚えるには早すぎる」

物陰から隠すことのできないハンターたちの多量の殺気が洩れ出ている、おそらくハンターだけではなく様々な種類の化け物がレフュージアの生き血をすりたいがために取り囮んでいるのだろう。レフュージアは大振りのナイフを鞘にしまいこんで銃を取り出した。ナイフと負けず劣らず大型な銃で、全く同じ型の銃がレフュージアの両手に握られていた。

その銃とは言えない禍々しさを含んだ銃は元々はただの小銃、レフ

ユージアが素人なりにいろいろ調べて改造を加え続けた結果、かなり大きくなってしまった。連射性に優れ、威力も高い。唯一のデメリットは重すぎて使い勝手が悪すぎるということなのだが……基礎的な身体能力がアベレージから外れきってしまっているレフユージアからしたら重さなどあつてないようなものだつた。

重力を意識して生きる人間などいないように、レフユージアは重鋼のような巨大で凶悪な銃を振り回してしまう。

「……一斉にかかるつくる氣らしいな」

レフユージアは自分を取り囲んでいるであろうつたくさんのハンターの存在を肌で感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7716o/>

BIOHAZARD beSidE

2011年2月25日09時44分発行